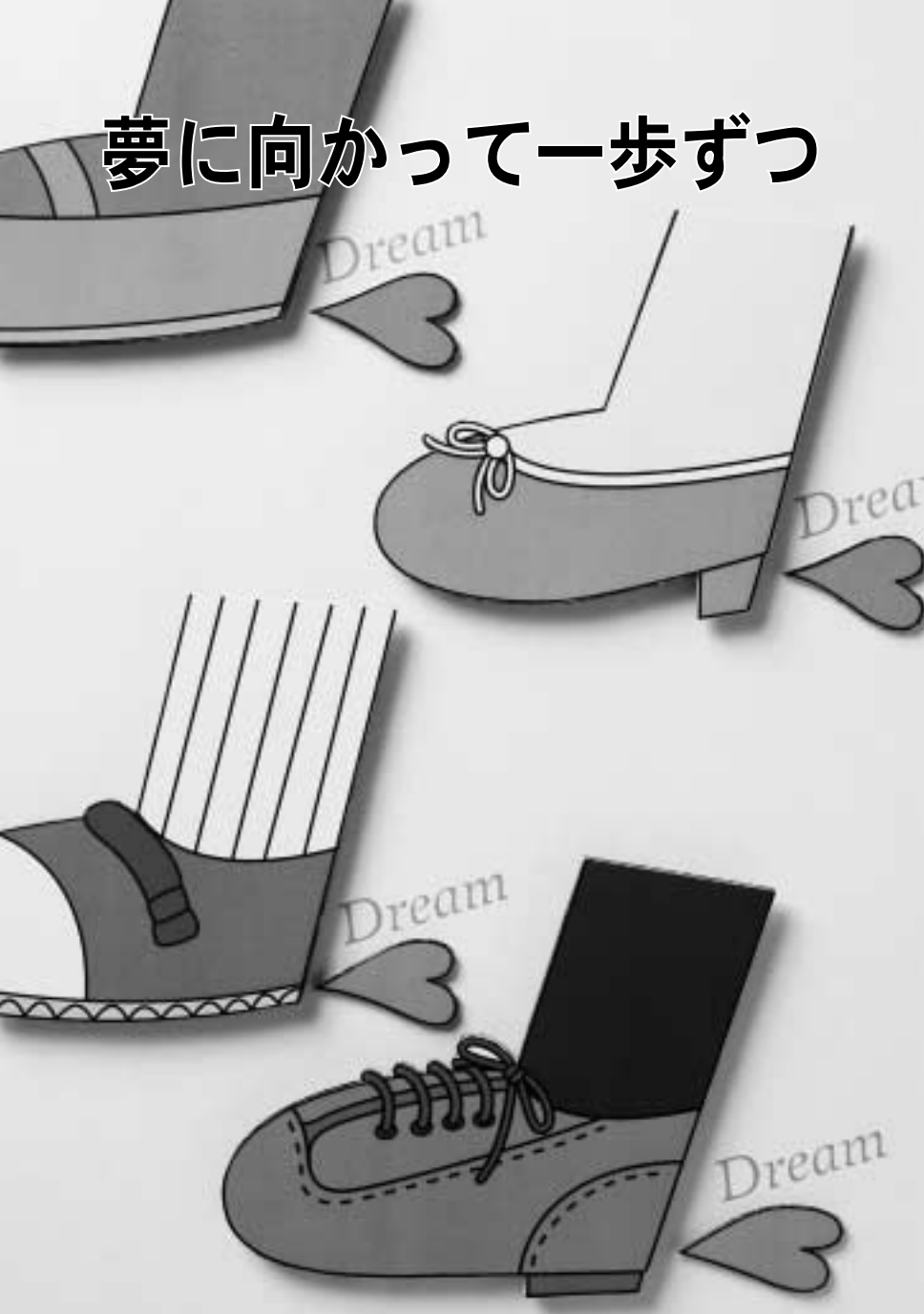


夢に向かって一歩ずつ



けいざいかんきょうもしゅうしょくじょうきょうも、とても厳しい時代です。ややもすれば自分のやりたいことなどはあきらめ、現実との妥協だけを考えがちになるのも、やむを得ないことなのかもしれません。

人間には、才能や能力に差があります。また、貧富の違いもあります。だから、自分が恵まれていないと思う人はますますあげてしまいがちです。

でも、人間には等しく与えられた力があります。それは、たとえ才能や能力に恵まれていなくとも、お金や地位がなくとも、夢を持ち、それを実現しようとする努力を続けていくことです。こんな時代だからこそ、その与えられた力を発揮し、夢に向かって一歩ずつあゆんでいきたいものです。



失った仕事

近藤雅司さん(26歳)は、子供のときから絵が大好きでした。大学を卒業するときも絵にかかわる仕事に就きたかったのですが、おいそれと見つかるものではありませんでした。両親にもそんな事情を理解してもらい、一年間の就職浪人をしました。

そしてやっと見つけたのが、アニメーション制作会社の請負契約社員でした。非正規雇用で身分は安定していませんが、好きな絵を描くことを仕事にできます。給料も安いのですが、実家から職場に通うことでなんとか生活はしのげます。

雅司さんは残業ものともせず、毎晩遅くまで仕事に精を出しました。

ところが、二年ほどたったとき、世界

的な金融危機きんゆうきぎの荒波あらのなみが日本を襲おそいました。
雅司さんの通う会社もその波から逃れることはできませんでした。会社では大幅なりストラが断行され、雅司さんも退職せざるを得ませんでした。

雅司さんは、ハローワークやインターネットで必死に絵にかかわる仕事を探しましたが、まったく見つかりません。絵にかかわる仕事どころか、条件をつけずに求職しても採用してくれるところなどはほとんどないのです。

雅司さんは絶望的な気持ちに陥おちいりました。もう、絵はあきらめようかとも思いました。でも、それを捨てたら自分の中で何かが壊れてしまうような気がしました。とても大事な何かが……。

お金か 生きがい

雅司さんは、幼おきななじみで同じく職を探している福田卓二さんふくだたくじ（26歳）を訪ねました。卓二さんは、雅司さんを突き放すように言いました。

「おまえは甘いよ。絵だなんて。すべては金かねだよ。俺おれはおまえと違い、クビになつたわけじゃあないんだ。給料が安いから辞やめたんだ。どんな仕事だつて同じさ。俺は金になる仕事を探す。おまえもそうしたほうがいいよ」

卓二さんは、半年おきくらいにもう五



回も会社を替わっています。給料の高い会社に乗りに換えてきたといいます。雅司さんには落ち着きがないように見えましたが、仕事を選んでいる場合じゃないというのはそのとおりなのかもしれないと思いました。でも、絵を描くことから離れるのは身を切られるようにつらく、とても決断がつきませんでした。雅司さんの悩みは深まるばかりでした。

そんなある日、雅司さんは偶然ある本を目にしました。聖路加国際病院の小児科医で、細谷亮太という方が書いた『川の見える病院から——がんとたたかう子どもたち』(岩崎書店)という本です。そこにはこんな一節がありました。

——日君はいま、十八歳です。小学校のころからトランペットが大好きでした。

おじいちゃんが音楽関係の仕事をしていたこともあって、H君は絶対にプロのトランペット吹きになるんだといつの間にか心を決めていました。

高校の音楽科を目ざし、専門の先生について特訓をはじめたばかりの中学二年生のとき、とんでもないことが起こってしまったのです。右手首すぐ上のあたりが腫れて、ひどく痛みました。最終的にたどり着いた子ども病院での診断は骨肉腫でした。

悪いできものだから、放っておけば命にかかわってしまうという説明があり、結局、手首の上十センチぐらいのところではH君の右手は切断され、そのあと強力な化学療法が二年ほどつづけられました。たまたまその子ども病院は、患者さん



の年齢に制限があり、十六歳になるとできただけ早くどこかへ移らなければなりません。そんな理由で私の外来へ治療が



終わってまもないH君がやってきたのは、彼が十七歳になるすこし前でした。

右手が無くなつてはトランペットは吹

けません。プロの音楽家はあきらめて高校も普通高校に通いだしたのですが、H君の音楽家になるんだという夢は消えなかつたのです。

……トランペットが無理でも、なにかラッパのなかでやれるものはないか……と考えた末に思いついたのがホルンでした。アルプスの角笛つがえに源があるといわれるホルンは、左手でバルブを操作し、右手はラッパの中につつこんで楽器を支えます。これならH君にも吹くことができました。とても大きな喜びでした。

「地味じみなだけに、トランペットよりもおもしろい点がいろいろあるんですよ」

明るい顔で教えてくれるH君に、私は完全に脱帽だつぼうし、スタンディング・オベーションをせずにはおれませんでした――

ささやかな 画家デビュー

この話を読んで、雅司さんは感動しました。いつまでもめそめそしていられないと思えました。

「よし、僕も絵は絶対にあきらめない。どんなことがあっても続けよう。継続は力なり。ともかくなんとかしよう」

雅司さんは新聞に折り込まれている求人広告紙で居酒屋いざかやのアルバイトを見つけ、夜はそこで働くことにしました。そして、昼は絵を描くことに専念することにしたのです。

やがて、雅司さんは自分の描いた絵をカラーコピーしてファイリングノートに貼り込み、作品集を作りました。それをたくさん用意し、雑誌を出している出版社数社に送ってみたのです。経費はアルバイト代から出しました。

そして三か月ほどたつたころ、ある出版社から電話がかかってきました。雅司さんに会いたいというのです。雅司さんは、別の作品集も用意して出版社を訪ねました。編集者と会って話をする、画料は安いけれども、雑誌のイラストを描いてみないかと打診だしんされました。雅司さんは、一も二もなく引き受けました。飛び上がるほどにうれしい気持ちでした。ささやかながら、雅司さんはこうして画家デビューすることができたのです。

まだ一社からしか話はありませんが、雅司さんは地道に自分の絵を売り込み、書籍のイラストレーターから画家の道をスタートさせようと決心したのです。

前に、すべては金だと言った幼なじみの福田卓二さんは、子供のころはとても活発なスポーツマンでした。雅司さんには、とてもお金第一と考えて幸せな人間には見えませんでした。雅司さんは卓二さんとも根気強く話し合い、生きがいの見いだせる仕事を探すように勧めたいと思いました。今の卓二さんは、自分 itu そそをついて本当に進むべき道から目をそらし、「お金、お金」と言っているように思えたのです。

雅司さんは、親が健在でその家に住まわせてもらっているからこんな勝手がで



きるのだとも自覚し、あらためて両親に感謝の気持ちを抱きました。きつとイラストレーターとして成功し、親孝行をしたいと思えました。

自分の夢を再確認することができた雅司さんの心の中には、自然に両親や友人を慮る気持ちがわいてきて、充実感が漂っていました。

実は、生きがいや喜びとは成功した向こう側にあるものではなく、自分のしたいことを続けていくその過程の中に存在しているのかもしれない。

継続は力なり

夢をあきらめず、それに向かつてこつこつと努力をしていくことは、自分に力を与えてくれます。まさに、「継続は力なり」です。

この言葉は、大正から昭和初期にかけて広島で活動した住岡夜晃すみおか やこうという人の『讚嘆の詩』さんたん うた（樹心社）に出てきます。住岡夜晃は熱心な浄土真宗じょうどしんしゅうの門徒もんとであり、教育者でもありました。それは次のような詩です。

青年よ強くなれ

牛のごとく、象のごとく、強くなれ

真に強いとは一道を生き抜くことである

性格の弱さ悲しむなかれ



性格の強さ必ずしも誇るに足らず

念願は人生を決定す 継続は力なり

真の強さは正しい念願を貫くにある

怒って腕力をふるうがごときは弱者の

至れるものである

悪友の誘惑ゆうわくによつて墮落だらくするがごときは

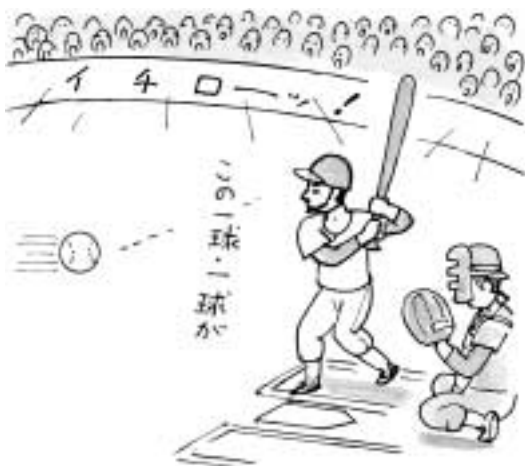
は弱者の標本である

青年よ強くなれ 大きくなれ

本当の強さとは、一道を生き抜くことであり、正しい念願を貫くことだと言っています。性格の強弱とか能力のあるなし、貧富や貴賤などに左右されるものではないということでしょう。鈍重どんじゆうでもよいかから、念願を持ち、それを継続することが力を生むという視点は、現代においても大切でしょう。



継続する一歩一歩の中に 生きがいがある



二〇〇九年（平成二十一年）、アメリカ大リーグ、シアトル・マリナーズのイチロー外野手は、九年連続二百本安打、メジャー通算二千本安打という大記録を達成しました。そのイチロー選手も、努力を継続することについてこう言っています。

「今自分にできること。がんばればできそうなこと。そういう積み重ねをできないかと、遠くの大きな目標は近づいてこない」

「千里の道も一歩から始まる」といい、「せんに涓滴岩を穿つ」といいます。どんな遠

大な行程も、わずかな一歩の集積です。また、後者の「涓滴」とは、水のしたたりのことです。したたり落ちる一滴一滴の水も、延々と落ち続ければ岩にも穴を開けるという意味です。遠くの大きな目標に向かって、一歩ずつ一歩ずつ努力を積み重ねていくことがイチロー選手の大記録につながったのです。

イチロー選手のような天才を持ち出すまでもなく、私たちのような凡人にしても、なんらかの目標を持ち、そこに向かって一歩ずつあゆんでいくことが大事なのではないでしょうか。前述の近藤雅司さんが絵の道へと突き進むことで自覚したように、実はその一歩一歩の中に生きがいや喜びが存在しているのだと思います。



継続を力にした先人たち

明治、大正、昭和と生き抜き、その無欲ぶりと六十五年に及ぶ行雲流水の生活から「宿無し興道」と言われて人々の崇敬を受けた沢木興道も、継続を大切に

した人でした。極貧の中で育ち、荒れた生活をしていた興道でしたが、十七歳のときに禅僧になろうと一念発起、三重県から着の身着のままで福井県の永平寺まで

歩き、小間使いとして雇ってもらって禅僧たちの真似をし抜いたのです。そしてついに禅を究め、駒澤大学の教授や、大本山総持寺の禅僧たちの指導役である後堂の職を拝命するに至りました。なんの学歴も経歴もない宿無し僧が、真似事か

ら始まった坐禅をやり抜いて最高の位に上りつめたのです。これも継続が生んだ力と言えるでしょう。

また、祖父の代から継続して職を継ぎ、宮大工の技を継承して薬師寺という歴史的な建物を再建した人もいます。西岡常一という人です。

常一のおじいさんは、常一を三歳のころから仕事場に連れていき、容赦なく鍛えたといいます。常一が学校に入るとき、おじいさんは両親の反対をよそに、工業学校ではなく農学校に入れました。周りにはあ然としましたが、そこには深慮遠謀がありました。おじいさんは、土で



瓦や壁を作り、木で建物を建てる宮大工の仕事には、農業こそが欠かせない基礎だという信念を持っていたのです。

そのようなおじいさんに育てられた常一は、やがて、火事になって焼け落ちた法隆寺金堂を再建し、また、高田好胤師の悲願に応じて室町時代に戦火で失われた薬師寺金堂をも再建したのでした。こうして薬師寺は、飛鳥時代そのままに、金堂、東塔、西塔が並び立ったのです。

これは、代を継いで継続した努力が実った成果といえます。

夢を持ち、目標を立ててそこに向かう努力を継続することは、時代を超えた価値を持つ大切な人間のいとなみです。私たちは、そのこと自体が持つ意味をも次の世代に継承していきたいものです。